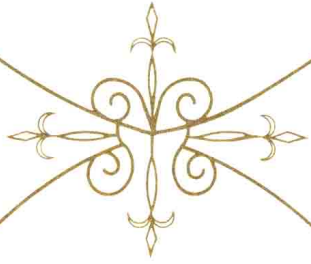
三島由紀夫
全集

9

三島由紀夫全集



9

IX

監修／石川淳　川端康成　中村光夫　武田泰淳
編纂／佐伯彰一　ドナルド・キーン　村松剛　田中美代子

新　潮　社

三島由紀夫全集第九巻

昭和四十八年六月二十日印刷
昭和四十八年六月二十五日発行

著者三島由紀夫
発行者佐藤亮一
装幀者杉山寧

発行所株式会社新潮社
〒162東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇-一一一一　振替東京八〇八
定価二五〇〇円
第二回配本（全35巻・補巻1）　落丁本・乱丁本はお取替えいたします
Copyright © 1973 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集　第九巻　目次

潮騒……七
博覽會……一六三
鍵のかかる部屋……一八一
復讐……二四一
詩を書く少年……二五七
志賀寺上人の戀……二七五
水音……二九五
沈める瀧……三二七
海と夕燒……五六五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

新聞紙……五七九
商ひ人……五九一
山の魂……六〇七
牡丹……六二五
解題……六三七
校訂……六四五

三島由紀夫全集　第九巻　小説（9）

潮騷

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

第一章

歌島は人口千四百、周圍一里に充たない小島である。

歌島に眺めのもつとも美しい場所が二つある。一つは島の頂きちかく、北西にむかつて建てられた八代神社である。

ここからは、島がその灣口に位ゐしてゐる伊勢海の周邊が隈なく見える。北には知多半島が迫り、東から北へ渥美半島が延びてゐる。西には宇治山田から津の四日市にいたる海岸線が隱見してゐる。

二百段の石段を昇つて、一雙の石の唐獅子に戍られた鳥居のところで見返ると、かういふ遠景にかこまれた古代さながらの伊勢の海が眺められた。もとはここに、枝が交錯して、鳥居の形をなした「鳥居の松」があつて、それが眺望におもしろい額縁を與へてゐたが、數年前、枯死してしまつた。

まだ松のみどりは淺いが、岸にちかい海面は、春の海藻の丹のいろに染つてゐる。西北の季節

風が、津の口からたえず吹きつけてゐるので、ここの眺めをたのしむには寒い。

八代神社は綿津見命を祀つてゐた。この海神の信仰は、漁夫たちの生活から自然に生れ、かれらはいつも海上の平穏を祈り、もし海難に遭つて救はれれば、何よりも先に、ここの社に奉納金を捧げるのであつた。

八代神社には六十六面の銅鏡の寶があつた。八世紀頃の葡萄鏡もあれば、日本に十五六面しかない六朝時代の鏡のコピイもあつた。鏡の裏面に彫られた鹿や栗鼠たちは、遠い昔、波斯の森のなかから、永い陸路や、八重の潮路をたどつて、世界の半ばを旅して來て、今この島に、住みならへてゐるのであつた。

眺めのもつとも美しいもう一つの場所は、島の東山の頂きに近い燈臺である。

燈臺の立つてゐる斷崖の下には、伊良湖水道の海流の響きが絶えなかつた。伊勢海と太平洋をつなぐこの狹窄な海門は、風のある日には、いくつもの渦を卷いた。水道を隔てて、渥美半島の端が迫つてをり、その石の多い荒涼とした波打際に、伊良湖崎の小さな無人の燈臺が立つてゐた。

歌島燈臺からは東南に太平洋の一部が望まれ、東北の渥美灣をへだてた山々のかなたには、西風の強い拂曉など、富士を見ることがあつた。

名古屋や四日市を出港し、あるひはそこへ入港する汽船が、灣内から外洋にちらばつた無數の漁船を縫つて伊良湖水道をとほるときに、燈臺員は望遠鏡をのぞいてゐて、いちはやくその船名を讀んだ。

レンズの視界に、三井ラインの貨物船、千九百噸の十勝丸が入つてくる。菜っ葉服の船員が二人、足踏みをしながら話してゐるのが見える。

しばらくして又、英國船タリスマン號が入港する。上甲板で輪投げをしてゐる船員の姿が鮮明に小さく見える。

燈臺員は番小屋の机に向つて、船舶通過報の帳面に、船名と信號符號と通過時分と方向とを記入する。それを電文に組んで連絡する。そのおかげで港の荷主は、はやばやと準備にかかれるのであつた。

午後になると燈臺のあたりは、沒する日が東山に遮られて、翳つた。明るい海の空に、鳶が舞つてゐる。鳶は天の高みで、兩翼をためすやうにかはるがはる撓らせて、さて下降に移るかと思ふと移らずに、急に空中であとずさりをして、帆翔に移つたりした。

日が暮れはてたころ、一人の漁師の若者が、手には巨きな平目をぶらさげて、村から燈臺へむかふ登り一方の山道を急いでゐた。

一昨年新制中學を出たばかりだから、まだ十八である。背丈は高く、體つきも立派で、顏立ちの稚なさだけがその年齢に適つてゐる。これ以上日燒けしやうのない肌と、この島の人たちの特色をなす形のよい鼻と、ひびわれた唇を持つてゐる。黑目がちな目はよく澄んでゐたが、それは海を職場とする者の海からの賜物で、決して知的な澄み方ではなかつた。彼の學校における成績

はひどくわるかつたのである。
今日一日の漁の仕事着のまま、死んだ父親の形見のズボンと粗末なジャンパアを身に着けてゐる。
若者はすでに深閑としてゐる小學校の校庭を拔け、水車のかたはらの坂を上つた。石段を昇つて、八代神社の裏手に出る。神社の庭に夕闇に包まれた桃の花がしらじらと見える。そこから燈臺まで十分足らず登ればよいのである。

その道は實に崎嶇としてゐて、馴れない人は晝でもつまづくだらうが、若者の足は目をつぶつてゐても松の根や岩を踏み分けて行くことができた。今のやうに、ものを考へながら歩いてゐてさへ、つまづかない。
先刻、まだ殘照のあるうちに、若者をのせた太平丸は歌島港にかへつた。若者は船主ともう一人の朋輩と一緒に、毎日このエンヂンのついた小舟に乘つて漁に行くのである。港へかへつて、組合の舟に漁獲を移して、濱へ舟を引きあげてから、燈臺長の家へもつてゆく平目を手にさげて、若者が家へひとまづかへらうとして濱づたひに來たときに、暮れかけた濱は、まだ多くの漁船を濱へ引き上げる掛聲でさわがしかつた。
一人の見知らぬ少女が、「算盤」と呼ばれる頑丈な木の枠を砂に立て、それに身を凭せかけて休んでゐた。その枠は、卷揚機で舟を引き上げるとき、舟の底にあてがつて、次々と上方へずらして行く道具であるが、少女はその作業を終つたあとで、一息入れてゐるところらしかつた。

額は汗ばみ、頬は燃えてゐた。寒い西風はかなり強かつたが、少女は作業にほてつた顔をそれにさらし、髪をなびかせてたのしんでゐるやうにみえた。綿入れの袖なしにモンペを穿き、手には汚れた軍手をしてゐる。健康な肌いろはほかの女たちと變らないが、目もとが涼しく、眉は靜かである。少女の目は西の海の空をじつと見つめてゐる。そこには黒ずんだ雲の堆積のあひだに、夕日の一點の紅ゐが沈んでゐる。

若者はこの顔に見覺えがない。歌島には見覺えのない顔はない筈だ。他者は一目で見分けられる。と謂つて、少女は他者らしい身裝はしてゐない。ただ、海に一人で見入つてゐるその樣子が、島の快活な女たちとはちがつてゐる。

若者はわざわざ、少女の前をとほつた。子供がめづらしいものを見るやうに、正面に立つてまともに少女を見た。少女はかるく眉をひきしめた。目は若者のはうを見ずに、じつと沖を見つめたままであつた。

無口な若者は、檢分がすむと足早にそこを立去つた。そのときはただ好奇心を充たされた幸福にぼんやりしてゐて、さて、こんな失禮な檢分が彼の頬に羞恥を呼びさましたのは、ずつとあと、つまり、燈臺へゆく山道をのぼりかけてゐる時になつてであつた。

若者は松並木のあひだから、潮のとどろきの昇つてくる眼下の海をながめた。月の出前の海は大そう暗かつた。

出會頭に丈の高い女の妖怪が立つてゐるといふ傳說のある「女の坂」を曲ると、燈臺の明るい窓が高く見えはじめる。その明るさは若者の目にしみた。村の發電機は久しく故障で、村ではラ

ムプの光りしか見ることがなかつたから。

かうして燈臺長のところへたびたび魚を屆けに行くのは、燈臺長に恩義を感じてゐるからである。新制中學の卒業の際、若者は落第して、もう一年卒業を引き延ばされさうになつた。燈臺のちかくへいつも焚付けの松葉をひろひに行くので、燈臺長の奥さんと近づきになつてゐた母親は、息子の卒業を引き延ばされては、生計が立ちゆかないと奥さんに愬へた。奥さんは燈臺長に話し、燈臺長は昵懇の校長に會ひに行つた。おかげで若者は、落第を免かれて、卒業することができたのである。

學校を出て、若者は漁に出る。ときどき燈臺へ獲物を屆ける。買物の用を足してあげる。さういふことから、燈臺長夫婦に大そう可愛がられるやうになつた。

燈臺へ昇るコンクリートの段々の手前に、小さな畑を控へた燈臺長の官舍があつた。厨口の硝子戸に奥さんの影がうごいてゐる。食事の仕度にかかつてゐるらしい。若者はそとから聲をかけた。奥さんは戸をあけた。

「おや、新治さんね」

默つてさし出された平目をうけとると、奥さんは高い聲でかう呼んだ。

「お父さん、久保さんがお魚を」

奥から燈臺長の質朴な聲がかう應へた。

「いつもいつもありがたう。まあ上つてゆきなさい、新治君」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co